

インドの言語学の理解に向けて（1）

— パーニニとパーニニ文法 —

広島大学

川村 悠人

1. 本稿の目的

日本の「花」と言えば桜，中世哲学で論究される「哲学者」と言えばアリストテレスを指すが，インドの「言語学」と言えば，サンスクリット語を扱う文法学，パーニニ文法学を指す。このことは、『言語学大辞典』（術語編）に収められた「インドの言語学」¹⁾がパーニニ文法学の解説である事実からも確かめられる。パーニニ文法学は伝統的に誰もが学ぶべき最重要の学問とされ，インドにおいて高い地位を与えられてきた²⁾。とりわけ，グプタ王朝（4世紀から6世紀頃）のもとサンスクリット古典文化が開くインド中世以降にはサンスクリット語を用いた学術活動に携わる誰もが——程度の差はあるにしても——文法学を知り，その活動の中で活用している。仏教徒も例外ではない。玄奘（7世紀頃）の伝記『大慈恩寺三蔵法師伝』によれば，玄奘はインドの地でバラモンの文法書も学んだという³⁾。このことから，その当時，ナーランダーなどの仏教僧院で文法学が学習科目の一つであったことが推測される。西洋で聖書学や神学を支えるべく自由七科の一つとして文法学が学ばれたように，南アジアでも学術活動に必須の知的体系として文法学が学ばれたのである。

現存するパーニニ文法学文献のうち最古のものは，古代インドの文法家パーニニ（紀元前5世紀から紀元前4世紀頃）の手になる文典『八課集』（*Aṣṭādhyāyī*）であり，そこではサンスクリット語の単語からなる文に対して文法規則を通じた派生説明が与えられる。パーニニの文法規則はサンスクリット文献の至るところで明示的あるいは暗示的に論及され，パーニニの文法規則の理解が文献に示される思想の理解の核となる場合もある。その典型例は，進行為（運動）というものに関する言語表現の不可能性を説く龍樹（2世紀）の論である。この龍樹の論はパーニニ文法の理論に立脚しており，パーニニ文典の正しい理解なくしてそ

¹⁾ 熊本 1996。

²⁾ 文法学の地位については川村 2017: 18-23及び川村 2018a: 238-241を参照せよ。

³⁾ 長澤 1998: 167。

れを正しく読み解くことはできない⁴⁾。当該の例が示すように、パーニニ文典の理解はインド学仏教学の深化に寄与しうるものである。

本稿は、このようなパーニニ文典の内実を噛み砕いて紹介していく一連の研究ノートの第1号にあたる。この第1号では、パーニニという人物並びにパーニニ文法の内容、方法、構成について概説する。続く第2号以降で、具体的な名詞形や動詞形がどのように派生説明されるのかを順次、懇切丁寧に解説していくことを予定している。本邦初の試みである。かつて桂紹隆は『インド人の論理学』の中で「インド人の思惟方法を知るためには、何よりもまずパーニニ、およびパーニニ派のインド土着文法学のなかにその答えを見いだすよう努力しなければならない」と述べた⁵⁾。しかしパーニニ文典の中に答えを見出そうとする営みは、パーニニ文典そのものに対する理解があつて初めて成立する。筆者が公表を企図している一連の研究ノートはそのような理解を促進するものである。

2. パーニニ以前

パーニニの文典『八課集』はまとまった形で現在に伝わるインド最古の文典である。しかしこのことは、パーニニが文法研究の鼻祖であり彼以前には文法研究が全くなされていなかったことを意味するわけではない。パーニニがこの自らの文典中で先代の師たちへしばしば言及していることから、パーニニはすでに始まっていた文法研究の伝統の中で育った人物であることが知られ、彼以前にも何らかの文典のようなものが存在していた可能性も示唆される。ソクラテス以前にすでに哲学者たちがいたように、パーニニ以前にもすでに文法学者たちはいたのである。ただ、おそらくパーニニの文典が極めて卓立していたために、他の文典は脇へと追いやられ、結果としてパーニニの文典が現存最古の文典として今に伝わったものと思われる。パーニニ文法学の歴史において文法家たちの議論の源泉となるのはこのパーニニ文典である⁶⁾。

⁴⁾ 龍樹が立脚するパーニニ文法の理論および龍樹の議論の詳細は小川 1991及びOgawa 2005aに与えられている。その要点の説明は桂 1998: 206–210に見ることができる。

⁵⁾ 桂 1998: 220。同じく桂は早稲田大学東洋哲学会第38回大会（2021年6月12日）での講演「龍樹における言語と存在」の中でも「パーニニ文法学を学ぶことなくしてインド人の学術的営みを真に理解することはできないと言うのは、過激に過ぎるかもしれませんが、私の信念であります。」という自身の信条を吐露している（桂 2021: 15）。この講演会の発表資料は「龍樹における存在と言語—羅什の視点から」と題して2022年3月発刊予定の『東洋の思想と宗教』（早稲田大学東洋哲学会）に収められることになっている。本雑誌への提出原稿を共有していただいた桂紹隆先生に感謝する。この最終原稿の中でも上に引用した言葉はそのまま残されている（ただし読点の位置が一部で修正されている）。

⁶⁾ 古代インドにおける言語研究の一側面として語源に対する探求についても述べておく必要があろう。古代ギリシアにおけるソフィストたちに重んじられ、プラトン（紀元前5世紀から紀元前4世紀頃）の『クラテュロス』（Κρατύλος）で示されるような語源解釈（今で言う通俗語源解釈）の伝統が、古代インドにもあった。祭式行為の次第、意義、神話的背景などを説くヴェーダ祭儀書文献の時代（紀元前800年から紀元前650年頃）からこのような語源解釈が頻繁になされるようになり、その方法はヤースカ（紀元前5

パーニニ文典の中では、先代の文法学者の名として以下の10人の名が挙げられている。

- アーピシヤリ（規則6.1.92）
- カーシュヤパ（規則1.2.25, 8.4.67）
- ガールギヤ（規則7.3.99, 8.3.20, 8.4.67）
- ガーラヴァ（規則6.3.61, 7.1.74, 7.3.99, 8.4.67）
- チャークラヴァルマナ（規則6.1.130）
- バーラドゥヴァージヤ（規則7.2.63）
- シャーカターヤナ（規則3.4.111, 8.3.18, 8.4.50）
- シャーカリヤ（規則1.1.16, 6.1.127, 8.3.19, 8.4.51）
- セーナカ（規則5.4.112）
- スポーターヤナ（規則6.1.123）

これら他の学匠の名前は、「～の考えでは、～の見解では」を意味する属格形の表現によって文法規則中に現れる⁷⁾。後代の文法家たちの解釈では、他の学匠の見解としての規定を与える文法規則は必ずしも適用されねばならないものではなく、任意に適用されるものである⁸⁾。すなわち、当該の規定が適用されて派生する語形と適用されずに派生する語形のいずれもが派生可能と見なされる。他の学匠の見解としての規定をなす文法規則に、さらに規則適用の任意性を示す *vā* 「任意に」などの単語があるときは、当該の学匠への言及はその学匠への崇敬を表すために (*pūjārtha*) 述べられていると後代の文法家たちは解している⁹⁾。

他の学匠名に言及する以外にも、他の文法体系の存在を示唆する証拠がパーニニ文典にはある。例えば、パーニニ文典では主格双数語尾と対格双数語尾は規則4.1.2でそれぞれ *au*, *auṭ* と提示されるが、規則7.1.18ではこれら主格双数語尾と対格双数語尾の両者を表すものとして *auṆ* という要素も提示されている（大文字で表している *ṭ* や *Ṇ* は指標辞〔後述〕である）。また規則4.1.2で提示される具格単数語尾の形は *Tā* であるが、規則7.3.105と7.3.120では具格単数語尾を指して *āṆ* という形も使われている。*ṭ* という指標辞ではなく *Ṇ* という

世紀から紀元前4世紀頃)の『語源学』の中で体系化される。ヤースカが『語源学』で語る語源説明の方法は文法学による言語分析の存在を前提としたものであり(川村 2021b: 29-36)、彼は「文法学」(*vyākaraṇa*)、「文法学者」(*vaiyākaraṇa*)、「非文法学者」(*avaiyākaraṇa*)という用語も使用している(Niruka 1.12, 1.15, 2.3, 9.5)。そもそもヤースカは自身の語源学の役割の一つを文法学の補完(*vyākaraṇasya kārtsnyam*)にあるとしている(Nirukta 1.15)。以上のことから、ヤースカの時代には文法学という学問分野がすでに確立されていたことが知られる。ただし、ヤースカがパーニニより前の人物であるかどうかには議論の余地がある(Cardona 1976: 270-273; Kahrs 1998: 13-14)。

⁷⁾ 規則8.4.67では *agārgyakāśyapagālavānām* 「ガールギヤ、カーシュヤパ、ガーラヴァ以外の見解では」という否定辞を伴う言い方で、三人の先師が言及されている。

⁸⁾ Cardona 1976: 146.

⁹⁾ Cardona 1976: 146.

指標辞を付されたこれら $au\dot{N}$ や $a\dot{N}$ は、前代の文法家の用語をそのまま反映したものと考えられる¹⁰⁾。そう考える以外に、パーニニが $au\dot{N}$ や $a\dot{N}$ という指標辞 \dot{N} を付した形を用いた理由は見つけ難いとされる¹¹⁾。

加えて、パーニニより後の文法家たちは、パーニニ以前に文法研究が存在していたことを様々な形で証言している。例えば、カーティヤーヤナ（紀元前3世紀）とパタンジャリ（紀元前2世紀）はパーニニ文典中のいくつかの規則をパーニニ以前の文法学者によるものとする。また、パタンジャリは、パーニニが先師の一人として挙げるアーピシャリの文法規定や文法体系に言及している。さらに、パーニニ文典では様々な術語 (*sañjāna*) が用いられるが、多くの術語がパーニニ以前の先師たちから借用されたものであることを文法家たちは述べている¹²⁾。

3. パーニニ

以上のように、パーニニ以前から言語に対する体系的な考究はすでになされていたと考えられる。それらの成果をある場合には引き継ぎ、ある場合には咀嚼して改変を加えながら、パーニニは自らの文法体系を構築した。先学による言語研究の成果を単にまとめたというわけではない¹³⁾。パーニニ文法の全体像については後に説明するが¹⁴⁾、彼の文法の基軸をなすのは文典『八課集』である。八つの課 (*adhyāya*) から構成されることからこの名がある。そこには、ヴェーダ文献に現れるヴェーダ語と当時の知識人たちが日常生活の中で使用していたサンスクリット語を派生説明するための約4000の文法規則が定式化されている。同文典では言語の地方差も記録されている（例えば規則7.3.24）¹⁵⁾。後の時代の文法家たちは、これらパーニニの文法規則をめぐって精緻な議論を展開することになる¹⁶⁾。

¹⁰⁾ Cardona 1997: 51. パタンジャリは $au\dot{N}$ を前代の文法規則から取られたものであるとする (Cardona 1976: 148)。

¹¹⁾ Cardona 2014: 2, note 6.

¹²⁾ 以上については Cardona 1976: 147を見よ。

¹³⁾ Cardona 2012は、*akṣanvat*「目を有する」という語形を例にとり、パーニニが自身の文法体系を構築するにあたり先学らの理論を批判的に検討したに違いないことを論じている。

¹⁴⁾ §5以降を見よ。

¹⁵⁾ この規則によれば、複合語の後分にくる *nagara*「町」という語がヴリッディ派生と呼ばれる造語法により前分の語と共に最初の母音を延長された結果、東の地方では *nāgara* という形を持つ語形が現れる。複合語の前分の語だけにヴリッディが起った語形が標準的なものである。

¹⁶⁾ 現代論理学において、公理の体系が妥当な論理法則を証明するとき、公理の体系には健全性と完全性が求められる。前者は、公理の体系が不必要な論理法則をも証明してしまうものではないこと、つまり過剰性を持たないことであり、後者は、公理の体系が必要な論理法則を全て証明するものであること、つまり不足性を持たないことである(野矢 2006: 178-181)。パーニニの文法規則にも同じことが求められる。パーニニの文法規則が文法家たちに問題視されて議論を引き起こすのは、文法規則が不要な語形をも派生説明してしまいかねないとき(過剰性)、あるいは文法規則が必要な語形を派生説明できそうにないとき(不足性)、である。これら二つの欠陥が取り除かれたとき、パーニニ文法は健全性と完全性を得る。

パーニニは、歴史的には、ガンダーラ国がアケメネス朝ペルシア（紀元前550年から紀元前330年頃）の統治下にあった時代と地域の学者と想定される¹⁷⁾。伝承では、西北インドのシャラートウラ村（現パキスタンのアトック付近）の出身である。7世紀にインドの地へ求法の旅にやってきた玄奘の『大唐西域記』によれば、このシャラートウラ村には、玄奘が訪れた当時、パーニニの像が安置されていたようである。玄奘は、この村でパーニニ文典の学習が一向に進まないとして子供を鞭打って教育しているバラモンを一人の阿羅漢が目撃したことを伝えている¹⁸⁾。

パーニニが文法規則を通じて派生説明する対象の一つである知識人たちのサンスクリット語は、彼の時代にこの地域で話されていたものと考えられる。パーニニが各単語に対して高低アクセントの位置をも明確に規定していることから、このサンスクリット語が当時の生きた言語であったことがわかる。この高低アクセントは後の時代には失われてしまったようで、聖典解釈学派のクマーリラ（7世紀）は、ヴェーダ聖典の言語にはアクセントの区別があるが、長老たちがなす日常の言語運用にはアクセントの区別がないことを伝えている¹⁹⁾。

インドの説話集『五つの教え』（*Pañcatantra*）が伝えるところによれば、偉大なる文法家パーニニは、獅子に噛み殺されてその人生の幕を閉じたらしい²⁰⁾。なお、パーニニという名の人物が詩作品を残したことを後代の文献は伝えているが²¹⁾、この人物が当該の文法家パーニニと同一人物かどうかは不明である。

4. パーニニ文典の内容と方法

上にも述べたように、パーニニ文典は文法規則から構成される。それぞれの文法規則は互いに関連し合って特定の名詞形や動詞形といった単語（屈折形）を派生し、それら単語からなる文を派生する。単語を派生説明するために、世の中に無数に存在する単語それぞれに対してそれぞれ文法規則を設けることは、とてつもない労力を有することであり、全く効率的ではない。必要最小限の労力で言語を説明するためにとられるべき方法は、多くの対象に対して一般的に妥当する規則を設けつつ、それに当てはまらない対象がある場合には例外的な規則を別途用意するというものである。このような方法によって、言語をより簡潔に派生説明することが可能となる²²⁾。パーニニ文法はまさにこの方法を採用しており、言語に対する

¹⁷⁾ 後藤 1990: 65。

¹⁸⁾ 水谷 1999: 259–261。

¹⁹⁾ 伊原 1987: 20。

²⁰⁾ 田中・上村 1980: 215。

²¹⁾ 小林 1988: 13, notes 6–9。

²²⁾ MBh (I.6.3–4): *kiṃ cit sāmānyaviśeṣavallakṣaṇaṃ pravartyaṃ yenālpena yatnena mahato mahataḥ śabaughān pratipadyeran* | (「一般性と特殊性を備えた特定の文法規則が発動すべきである。それによって、わずかな労力で膨大な言葉の大水を踏破できるように」)

派生説明の効率の良さを追求している。パーニニ文法学の伝統において、多くの対象に対して一般的に妥当する規則は一般規則 (utsarga), この一般規則に当てはまらない対象のために別途用意される規則は例外規則 (apavāda) と呼ばれる。一方、このように一般規則と例外規則を立てることは、およそ文法というものに普遍的に見出される特徴であり、パーニニ文法に限ったものではない。パーニニ文法が持つ大きな特徴は、現実の言語運用の中には見出されない数々の要素を設定して単語と文の派生を導く点にある。そのような要素の具体例については、パーニニ文法による単語派生の実際を解説する第2号以降で見ることになる。

単語を、そして文を派生するにあたり、パーニニ文法では言語の最小単位として動詞語基 (dhātu), 名詞語基 (prātipadika), 接辞 (pratyaya) などが実際の言語資料から抽出され²³⁾、文法規則が規定する操作の対象となる²⁴⁾。動詞語基や名詞語基を出発点にすえて、それらに順次接辞が導入され、その接辞導入を契機として一定の音韻変化 (厳密にはある音に対する別の音の代置操作) や加音の付加などが施されて、動詞形や名詞形からなる文の派生が完了する。これらの操作が全て文法規則を通じて規定されており、これらの操作を何らかの点で規制する文法規則、つまり文法規則のための文法規則であるメタ規則もパーニニ文典には定式化されている。パーニニ文典に設けられている文法規則には大別すると以下のようなものがある。それぞれに対する具体的な例については、先と同様、本研究ノートの第2号以降で適宜見ていくことになる。

操作規則 (vidhisūtra)

動詞語基の後への接辞導入といった操作を規定する規則であり、これ以外の文法規則

²³⁾ これら語基や接辞を抽出する原理自体はパーニニ文法では与えられていない。後の文法家は、文の構成要素として一定の意味を有する単語を、そして単語の構成要素として一定の意味を有する語基や接辞などを実際の言語運用の中から抽出する原理を説いている。それは「肯定的随伴 (A があれば B があること) と否定的随伴 (A がなければ B がないこと) (anvayavyarireka) の原理として知られる。これについては Cardona 1997: 428–431 を見よ。パタンジャリによる議論の一例を挙げておく。MBh on A 1.3.1 (I.255.13–20): iha pacatīty ukte kaś cic chabdaḥ śrūyate pacśabdaś cakārānto `tiśabdas ca pratyayah | artho `pi kaś cid gamyate viklittih kartṛtvam ekatvam ca | paṭhatīty ukte kaś cic chabdo hīyate kaś cid upajāyate kaś cid anvayī | pacśabdo hīyate paṭhśabda upajāyate `tiśabdo `nvayī | artho `pi kaś cid dhīyate kaś cid upajāyate kaś cid anvayī | viklittir hīyate paṭhikriyopajāyate kartṛtvam caikatvam cānvayī | te manyāmahe—yah śabdo hīyate tasyāsāv artho yo `rtho hīyate yah śabda upajāyate tasyāsāv artho yo `rtha upajāyate yah śabdo `nvayī tasyāsāv artho yo `rtho `nvayī | (「ここに pacatī 『一人の x が調理している』と述べられたとき、或る音声が開かれる。c 音で終わる pac という音声と接辞である ati という音声とである。意味もまた或るものが理解される。軟化作用と主体性と単数性とである。paṭhati 『一人の x が朗唱している』と述べられたとき、或る音声が消え、或る音声が開れ、或る音声が継起する。[すなわち] pac という音声が開れ、paṭh という音声が開れ、ati という音声が継起する。意味も或るものが消え、或るものが開れ、或るものが継起する。[すなわち] 軟化作用が消え、読誦作用が開れ、主体性と単数性が継起する。そのようなとき我々は考える。消える意味は消える音声の意味であり、現れる意味は現れる音声の意味であり、継起する意味は継起する音声の意味である。)]

²⁴⁾ 語基や接辞を設定するパーニニ文法の方法は、現代言語学で使われる形態素 (morpheme) の概念を引き起こしたと言われる (ロウビンズ 1992: 165)。

は全てこの操作規則を補助する役割を持つ。パーニニ文典で規定される操作は、何かの前に何かを導入するか、何かの後に何かを導入するか、何かを何かでとって変えるか、のいずれかである。

術語規則 (sañjñāsūtra)

特定の要素や要素群ごとに特定の術語 (sañjñā) を付して、それ以降その術語を使用することで、それら要素や要素群を指示できるようにするための規則である。これによって特定の要素や要素群を一言で指示することを可能としている。

解釈規則 (paribhāṣā)

文法規則を正しく解釈して正しく適用するための文法規則である。

主題提示規則 (adhikāra)

同じ主題を共有する後続の文法規則群を支配して、そこに読み込まれていく項目を提示する規則である。これによって個々の文法規則に特定の項目を逐一提示するという労力が省かれる。

制限規則 (niyamasūtra)

文法規則の適用領域を制限して、それが過剰に適用されてしまうことを防ぐための規則である。

拡大規則 (atideśasūtra)

文法規則の適用領域を拡大して、本来は適用できない環境化でも文法規則の適用を許すための規則である。

禁止規則 (pratiśedhasūtra, niśedhasūtra)

文法規則の適用を一定の条件下で禁ずる規則である。

パーニニ文典は、このような規則が関連し合いながら一定の順序で適用されて文を導き出すものであり、一つでも歯車が狂うと望ましい結果に辿り着くことができない。このような文の派生過程を通じて、文が、そして文を構成する単語がどのような構造を持っているかも示されることになる。カンドッティが近年指摘しているように、 $1+2=3$ という3を導き出す式から、3が1と2という要素からなっていることがわかるのと同じである²⁵⁾。この意味において、パーニニ文法は単語や文を派生すると同時にそれらの構造を分析して説明する

²⁵⁾ Candotti 2020: 15. 例えば、パーニニ文法が描く kāraka 「なす者、つくる者」という単語の派生過程から、同語が語基としての kṛ- (> kār-) と接辞としての -aka という2要素からなることがわかる。

という性格を有していると言える²⁶⁾。文法学はヴィヤーカラナ (vyākaraṇa) と呼ばれるが、この語は「形成、派生するもの」と「区分、分析するもの」のいずれをも意味するものである²⁷⁾。ただし、パーニニ文法それ自体の本領はあくまでも前者にあると思われる²⁸⁾。

なお、パーニニ文法では音の調音法に関わる音声学の知識は原則として前提とされている²⁹⁾。パタンジャリは文法学を「後の学問」(uttarā vidyā) と呼んで、文法学の学習前に音声学が学ばれていたことを示唆している³⁰⁾。

5. パーニニ文法の構成

次にパーニニ文法の構成について説明する。

5.1. 『音素表』

パーニニ文典は以下に提示する音素表を前提としている。「音の一覧」(akṣarasamāmnāya), 「短縮記号の短句」(pratyāhārasūtra), 「神の短句」(devasūtra), 「シヴァの短句」(śivasūtra) と様々に呼称される。「シヴァ」という神の名前が現れるのは、表を構成する音が全てシヴァから授けられたものであるという伝説があるからである³¹⁾。この音素表はパーニニ自身が構成したものであるとする立場が学界では普通であるが³²⁾、音素を一定の順序で並べた表のようなものはパーニニ以前から存在していた可能性がある³³⁾。

²⁶⁾ より詳しくは川村 2021a: 52–53を見よ。

²⁷⁾ 後藤 1989: 151, note 5は vi-ā-kṛ に「引き離す、様々に派生・展開・形成する」という意味を与える。vi-ā-kṛ および vyākaraṇa の意味に対する精察は Thieme 1982–1983: 23–28及び Cardona 1997: 565–572でなされている。川村 2017: 11では後者の解釈をまとめた。前者は vi-ā-kṛ の意味について次のように述べている。Thieme 1982–1983: 24.10–14: “TS 6.4.7.3 seems to give a clue how *vyā + kṛ*, from which is derived post-vedic *ākṛti*-f. ‘form’, *ākāra*-m. ‘shape’, came to be used in the sense of ‘forming’. Originally, it must have meant ‘to drive asunder and thereby ‘unfold’’. That’s why Indra in order to ‘drive asunder’ and thereby ‘form’ speech, had to step in the middle (inside) of it.” ここで言及される TS 6.4.7.3は、混沌とした状態にあった言葉をインドラが区分／形成した物語 (川村 2018a: 80) を伝える個所である。そこで使用される vi-ā-kṛ の派生形 *vyākaro*t にティームは「分解」と「形成」の二つの意味を見てとっている。

²⁸⁾ Thieme 1982–1983: 11, 後藤 1990: 70。

²⁹⁾ Cardona 1983: 1–2。

³⁰⁾ Cardona 1983: 5. MBh on A 1.2.32 (I.208.19–20): *vyākaraṇam nāmeyam uttarā vidyā | so 'sau chandaḥśāstreṣv abhivinīta upalabdhyaṅvāgantum utsahate |*

³¹⁾ 文法家ハラダッタ (12世紀) は次のような詩を引いている。PM (I.9): *yenākṣarasamāmnāyam adhigamya maheśvarāt | kṛtsnam vyākaraṇam proktaṁ tasmai pāṇinaye namaḥ |* (「大主宰神 [シヴァ] から音素表を証得して文法全体を公布したパーニニに表敬」)

³²⁾ Cardona 1976: 160–161。

³³⁾ ティームは、『アタルヴァ・ヴェーダ』や『マイトラヤニー本集』に現れるある詩節が音素を並べた表に言及するものであることを論じている (Thieme 1985)。仮にティームの論が正しいとすれば、すでにその時代にある種の音素表が存在していたことになる。その時代に知られていたと考えられる音素表の形としてティームが提示するものを参考までに挙げておく (Thieme 1985: 559)。

- (1) a i u Ṇ
- (2) ṛ ḷ K
- (3) e o ṅ
- (4) ai au C
- (5) ha ya va ra Ṭ
- (6) lĀ Ṇ
- (7) ña ma ña ṇa na M
- (8) jha bha ṅ
- (9) gha dha ḍha Ṣ
- (10) ja ba ga ḍa ḍa Ś
- (11) kha pha cha ṭha ṭha ca ṭa ṭa V
- (12) ka pa Y
- (13) śa ṣa sa R
- (14) ha L

このような音素表を設ける理由は、これによって複数の音を一括して指示する短縮記号 (pratyāhāra) をつくり、この短縮記号を使うことで文法規則を簡略にして、文法規則による言葉の派生説明を簡略にするためである³⁴⁾。

音素群 (1)–(14) それぞれの最終位置にある子音は IT と呼ばれる指標音 (anubandha) である (規則1.3.3)。これらの指標音を使って、例えば aC ([1] a から [4] C までの音、つまり全ての母音)、haL ([5] h から [14] L までの音、つまり全ての子音)、aL ([1] a から [14] L までの音、つまり全ての音) といったように、複数の音を指示する短縮記号が形成されるのである (規則1.1.71)。(5) 以降に子音が配置されているが、それら子音に付されている a 音は、子音の発声を容易にするため、あるいは子音の発声を可能とするために付されているものであり³⁵⁾、前者の場合、現代の用語で母音挿入 (anaptyxis) と言われる現象である。この発声

y r l v
k c ṭ t p
ś ṣ s h

³⁴⁾ KV (I.2): atha kimartha varṇānām upadeśaḥ | pratyāhārthaḥ | pratyāhāro lāghavena śāstrapravṛttyarthah | (「【問】何のために諸音素を教示するのか。【答】短縮記号のためである。短縮記号は容易に文法学の活動を行うためのものである」)

³⁵⁾ 文法家たちは、(6) の l 音に付されている a 音は発声用の母音 a ではなく指標辞としての鼻母音 Ā (規則1.3.2) と見なしている (Cardona 1969: 12, note 31)。その目的は、規則1.1.51: ur aṅ raparaḥ の raparaḥ における ra を、「r 音」を意味する ra ではなく、r 音と l 音を指示する rĀ とする点にある。ṛ 音と ḷ 音は同類音と見なされるから (vt. 5 on A 1.1.9: ṛkāraḥkārayoḥ savarṇavidhiḥ)、規則中の ur という ṛ の属格形によって ṛ 音と同類音である ḷ 音も指示される。以上により、例えば母音 ṛ に a が代置されるときには a に r が後続し、母音 ḷ に a が代置されるときには a に l が後続するという規定内容が得られる (KV on śivasūtra

用の母音がなければ、例えば (5) の音素群を読みあげるとき、hyvr という子音連続を読み上げなければならないが、そのままでは発声が困難である。あるいは、そもそも単独の子音それ自体、母音を後続させずには発声できないと考えられている³⁶⁾。

(1)–(4) に挙げられる母音 (aC) は、その同類音 (savarna) も指示する (規則1.1.69)。同類音とは、同じ調音位置と口腔内の同じ調音動作をもって発せられる音である (規則1.1.9)³⁷⁾。それぞれの母音には短母音 (hrasva, 1 モーラ), 長母音 (dīrgha, 2 モーラ), 延伸母音 (pluta, 3 モーラ) の区別, 非鼻母音・口母音 (ananunāsika) と鼻母音 (anunāsika) の区別, 高アクセント母音 (udātta), 曲アクセント母音 (svarita), 低アクセント母音 (anudātta) の区別がある。これらはすべて同じ調音位置と同じ調音動作によって発声される音であるので、同類音と見なされる。したがって、例えば音素表における a は、3 (短母音, 長母音, 延伸母音) × 3 (高アクセント母音, 曲アクセント母音, 低アクセント母音) × 2 (非鼻母音, 鼻母音) で計18種の音を指示することができる。母音 ᳵ には長母音がないので、それが指示する母音の種類は12種となる³⁸⁾。複母音 (sandhyakṣara) である e (a + i), ai (a + e), o (a + u), au (a + o) には短母音がないため、それらが指示する母音の種類も同じく12種となる。

音素表の音群に加え、パーニニは動詞語基 (dhātu), 接辞 (pratyaya), 加音 (āgama) に

6 [I.4]: lakāre tv anunāsikah pratiññāyate | tena ur an rapara ity atra ra iti pratyāhāragrahaṇāl laparatvam api bhavati)。

³⁶⁾ SK (I.4): iti māheśvarāṇi sūtrāṇy anādisaññārthāni | eṣām antyā itaḥ | laṅsūtre 'kāraś ca | hakārādiṣv akāra uccāraṇārthaḥ || (「以上が大主宰神からもたらされた諸々の短句であり、aṅ などの用語をつくるためのものである。これら [短句] の最終音は指標音である。laṅ という短句の箇所では a 音も [指標音である]。h 音などにおける a 音は発声用のものである」)

BM (I.5): hakārādīnām sukhocāraṇārthaṃ punaḥ punar akārapāṭha ity arthaḥ | anyathā hyvr ity evaṃ kliṣṭocāraṇāpatter iti bhāvah | athavā acam vinā halām uccāraṇābhāvāt punaḥ punar akārapāṭho hakārādyuccāraṇārtha ity eva vyākhyeyam | ata evocair udāttaḥ iti sūtre bhāṣyam—nāntareṇācam vyañjanasyocāraṇam bhavati iti | atra ca idam eva akārasya punaḥ punar uccāraṇam jñāpakam | (「h 音などを楽に発声するため繰り返し a 音が読まれている。このような意味である。さもなければ、hyvr というこのような場合に発声が困難となる、ということが意図されている。あるいは、母音なしでは子音は発声されないから、h 音などを発声できるよう繰り返し a 音が読まれている、とのみ説明されるべきである。まさにこれゆえ、uccair udāttaḥ [規則1.2.29] という文法規則に対して『大注釈』は『母音がなくては子音は発声されない』と述べている。そして、まさにこの、a 音が繰り返し発声されていることが、このこと [母音なしでは子音は発声されないこと] に対する指標である」)

³⁷⁾ 規則1.1.9: tulyāsyaprayatnaṃ savarnaṃ | 音が発声される場所である調音位置には、軟口蓋 (kaṅṭha 「喉」), 硬口蓋 (tālu), 口腔内の最上点 (mūrdhan), 歯 (danta), 唇 (oṣṭha) の五つがある。規則中で言われる調音動作 (prayatna 「労力」) とは、舌や唇とこれら五つの調音位置を接触させたり放したりする動作のことである。二つ以上の音がこのような調音位置と調音動作を同じくしているとき、それらの音は同類音と呼ばれる。ここで言われる調音動作は口腔内で行われるものが意図されており、口腔外の動作は意図されていない。したがって、口腔外の調音動作によって生み出される有声音と無声音の区別や有気音と無気音の区別は、特定の二つの音が同類音と見なされることを妨げない。例えば、k 音は無声音、g 音は有声音であるが、両者は同じ調音位置 (喉) と口腔内の同じ調音動作 (完全閉鎖) を有する点で同類音と理解される。k 音という無気音と kh 音という有気音の場合も同様である。

³⁸⁾ ᳵ 音と ᳶ 音を同類音と見なす立場では (vt. 5 on A 1.1.9), ᳵ 音と ᳶ 音はそれぞれ30種の母音 (18種の ᳵ 音と12種の ᳶ 音) を指示することになる。

も指標音を付すことによって、単語の派生手続き上でそれらが有する機能や性質を指定している（規則1.3.2–1.3.8）。指標音はそれらが具体的な派生手続きに入った段階で音素としては存在しないものと見なされる（規則1.3.9）。本研究ノートでは、指標音は大文字で示し、発音の便宜上子音に付随している母音には下線を引く。

5.2. 『規則集』／『八課集』

パーニニの文法規則はスートラ（sūtra）と呼ばれ、そのような文法規則が一定の順序で配列された『規則集』（sūtrapāṭha）がパーニニ文法の基幹となる。本研究ノートにおいて「パーニニ文典」という名で意図しているのはこの『規則集』である。『規則集』を構成するスートラは、通常、短く簡潔な式のようなあり方をした短句であるが、項目を列挙するために長くなっているものも存在する（例えば規則3.2.21や規則4.1.2）。『規則集』は、八つの課から構成されていることから、『八課集』または『八集』（Aṣṭaka）と呼ばれる。八つの課はそれぞれ四つの節に区切られ、これらそれぞれの四半分（pāda）が一定数の文法規則によって構成される。このような仕方では、『八課集』には約4000の文法規則が配列されている。本研究ノートでは、例えば規則1.1.1のような言い方でパーニニの文法規則を指示する。規則1.1.1は『八課集』第一課第一節第一規則を指す。

パーニニの文法規則は、言葉遣いの点でも内容の点でも一切の無駄を排して極度に圧縮されたものであり³⁹⁾、そのような規則が次々に淡々と提示されていく。このような文法規則からなる『八課集』は、ただ通読しただけでは何がなんだかかわからない代物であり、その内容を真に理解するには先達による解説や先達が著した解説書が必要である。パーニニの文法規則を正しく理解するためにはある種の解説が必要であることは、すでにパタンジャリが述べていることである⁴⁰⁾。パーニニ文典の全規則を一つ一つ解説していく注解書として最もよく使われているのはジャヤーディティヤとヴァーマナによって7世紀頃に著された『カーシカー注解』（Kāśikāvṛtti）である。

³⁹⁾ 文法家ナーゲーシャ（17世紀から18世紀）が挙げる一つの解釈規則によれば、文法家は文法規則を1子音分の音量でも縮めることができれば、それを息子の誕生と同じくらい喜ぶそうである。PIŚ 122: ardhamātrālaghvena putrotsavam manyante vaiyākaraṇāḥ ||（「半モーラ [1子音分の音量] 縮めることができれば、文法家たちは [それを] 息子 [が生まれた時と同じ] 喜びと考える」）

⁴⁰⁾ MBh on vt. 14 (Paspasā) [I.12.23–26]: na hi sūtrata eva śabdān pratipadyante | kiṃ tarhi | vyākhyānataś ceti | pariḥṭam etat | tad eva sūtram viḡrhitam vyākhyānam bhavātīti | nanu cokatam na kevalāni carcāpadāni vyākhyānam vṛddhiḥ āt āj iti | kiṃ tarhi | udāharaṇam pratyudāharaṇam vākyādhyāhāra ity etatsamuditam vyākhyānam bhavātīti |（「実に文法規則だけを通じて [人が] 諸々の言葉を理解することはない。【問】その場合どうなるのか。【答】さらに解説が加わることで [言葉は理解される]。【反論】それは退けられる。文法規則それ自身が、分析されたときに解説となる。【反論】しかし、[例えば規則1.1.1における] vṛddhiḥ, āt, aic のように、単に繰り返される諸語は解説ではないと述べられている。【問】その場合どうなるのか。【答】例、反例、文補足というこれらを兼ね備えたものが解説となる」） MBh (Paspasā) [I.6.26]: vyākhyānato viśeṣapratipattir na hi samdehād alakṣaṇam |（「解説を通じて [文法規則に関する] 特定のものの理解が生まれる。実に、[文法規則に関して] 疑いがあるからとって文法規則が正しくないことにはならない」）

言葉遣いと内容を極度に圧縮して完成されたパーニニの文法規則 (sūtra) の性格は、伝統的な詩によって次のように歌われている。

文法規則とは、少ない音節からなり、疑惑を生み出さず、精髓を備え、全ての方向に顔を向け、余分なものがなく、非の打ち所がないものであると、文法規則に通ずる者らは知っている⁴¹⁾。

パタンジャリは、パーニニが文法規則を定式化した様とそこから帰結することを次のように語る。

権威に達した師 (パーニニ) は、ダルバ草という浄化具を手に持ち、清浄な空き地に東を向いて座し、多大な労力をもって、文法規則をもたらしめたものだった。そうであれば、[パーニニ文典において] 一音素たりとも無意味であることはあり得ない⁴²⁾。

文法家たちがパーニニの文法規則を議論する際には、ここで述べられている「パーニニは一音素たりとも無意味な音を使っているはずがない」という発想が働く。パーニニが残した一つ一つの金句には一切の無駄がないため、何か余計に見えるものがあると、そこには何らかの意図が隠されているに違いないと文法家たちは考えて、何らかの示唆される内容を見てとるのである。

5.3. 『動詞語基表』

『動詞語基表』(dhātupāṭha) は、動詞形派生や特定の名詞形派生の出発点となる動詞語基を、現在語幹形成法にしたがって10種に分類して配置したものである。全部で2000近くの動詞語基が挙げられている⁴³⁾。『規則集』には、この『動詞語基表』に現れる動詞語基を前提とした文法規則が設けられている (全ての規則がそうであるわけではない)。『動詞語基表』に挙がる動詞語基はアクセントや指標辞の有無によって特徴づけられており、それらによって、単語の派生手続きの中で当該の動詞語基がどの文法規則の適用を受けるのか、または受けないのか全てが動詞語基に渡ってわかるようになっている。このようなアクセントや、動詞語基に付された母音が指標辞であることを示す鼻母音化は伝承の過程で失われたが、現在はアクセントや鼻母音が理論の上から復元されている。『動詞語基表』が具体的にどのような仕

⁴¹⁾ alpākṣaram asandigdham sāravad viśvatomukham | astobham anavadyam ca sūtram sūtravidō viduḥ || この定義は、パーニニの文法規則に限らず、何であれスートラと言われるものの性格を説明する際に利用される。

⁴²⁾ MBh on vt. 7 to A 1.1.1 (I.39.10–12): pramāṇabhūta ācāryō darbhapavitrapāṇiḥ śucāv avakāṣe prānmukha upaviśyā mahatā yatnena sūtram praṇayati sma tatrāśakyam varṇenāpy anarthakena bhavitum . . . |

⁴³⁾ 『動詞語基表』の作者問題については Cardona 1976: 163–164を参照せよ。

方で単語派生に関わるのかについても、第2号以降、具体例に即した形で見ていくであろう。

『動詞語基表』の中身は後代による付加をともっており、後代に付加された文法規則 (sūtragaṇa) もそこには入り込んでいる⁴⁴⁾。また、本来『動詞語基表』には動詞語基のみが挙げられていたが、後代にはそれぞれの動詞語基が持つ意味を説明する所格形の単語が挿入されるに至る⁴⁵⁾。例えば、『動詞語基表』の冒頭には動詞語基 bhū「なる、生ずる、存在する」が挙がるが、本来は bhū とのみ提示されていたはずである。後代にはここに意味を説明する単語が追加されて、現在は bhū sattāyām「bhūは存在を意味する」という形で伝承されている⁴⁶⁾。このように、パーニニが知っていた当時の『動詞語基表』そのままの形は伝わっていない。現在利用される『動詞語基表』の形は、後代の文法家たちが注釈を施して伝えた『動詞語基表』のそれである。『動詞語基表』に注釈を施す作品として現存しているのは、マイトレヤラクシタ（11世紀）の『動詞語基の灯火』（*Dhātupradīpa*）、クシーラスヴァーミン（11世紀）の『乳河論』（*Kṣīratarāṅgiṇī*）、サーヤナ（13世紀から14世紀）の『マードヴァの動詞語基注解』（*Mādhavīyadhātvṛtti*）の三つである。

5.4. 『名詞語基表』

『名詞語基表』（*gaṇapāṭha*）は名詞類を261の群に振り分けて記載している文献である。パーニニは文法規則の中でこの『名詞語基表』の語群に言及して、当該の文法規則が規定する操作が適用される名詞類を指定している。このように、『規則集』は『動詞語基表』と同様に『名詞語基表』も前提としている。『名詞語基表』はパーニニ自身に帰せられ得るが、パーニニ以前にもすでに類似の語群表が構成されていたようである⁴⁷⁾。『動詞語基表』と同じく、『名詞語基表』の中身も後代による増補を伴うが、この傾向は『動詞語基表』よりも著しい。我々が現在手にして利用することができるのは、これも『動詞語基表』と同じく、すでに何らかの増補を経た形の『名詞語基表』であり、パーニニ自身が見ていた『名詞語基表』の姿は不明である。パーニニ文法学文献の中で、パーニニが言及する語群の中身を伝える最古の文献は『カーシカー注解』（7世紀）である。文法家ハラダッタ（12世紀）によれば、彼の時代には、この『カーシカー注解』以外にパーニニが文法規則の中で言及する名詞群の中身を提示する作品は存在していなかったらしい⁴⁸⁾。

『名詞語基表』に挙げられている語群には、網羅的語群 (*paripūrṇagaṇa*) と例示的語群

⁴⁴⁾ Cardona 1976: 161。

⁴⁵⁾ このような意味記載 (*arthapāṭha*) が後になされたものであることは、Cardona 1984によって説得的に証明された。

⁴⁶⁾ 文法家バットーージ・デークシタ（16世紀から17世紀）が伝えるところによると、『動詞語基表』に列挙される各動詞語基に意味記載を与えた人物の一人は、ビーマセーナという名の人物である (Ogawa 2005b: 96–97)。

⁴⁷⁾ Cardona 1976: 165。

⁴⁸⁾ PM (I.5): *vṛtтыantareṣu tu gaṇapāṭha eva nāsti* |

(ākṛtiganā) の2種がある。網羅的語群は、その語群を構成する名詞類が余すところなく列挙されている語群であり、例示的語群は、その語群に属すべき名詞類のうちの代表例だけが列挙されている語群である⁴⁹⁾。語群に特定の単語が列挙されていなくても、その語群が例示的語群であれば、当該の単語をその語群に属するものと見なすことができ、文法規則の適用対象とすることができる。このことからわかるように、例示的語群という概念は、難語の正当化(文法規則により派生説明を与えること)にとって非常に便利な装置である。その証拠に、時代が下れば下るほど、例示的語群と見なされる語群は増える傾向にある。

5.5. 『ウナーディ規則』

『ウナーディ規則』(uṇādisūtra) は、主にパーニニ文典が直接的には規定していない接辞による名詞造語法を定めた規則集である。特徴としては、そのような名詞類を全て動詞語基から派生させる点にあり、動詞語基の後に多種多様な接辞の導入を規定している。『ウナーディ規則』には5部からなるもの(pañcapāḍī)と10部からなるもの(daśapāḍī)が現在伝わっているが、後者は、前者を利用しながら構成された後代のものである⁵⁰⁾。『ウナーディ規則』の作者や年代ははっきりしないが、一つ確かなことは、パーニニもまたこの『ウナーディ規則』で規定される類いの接辞を知っており、それを通じた単語の派生説明を自身の体系の中で受け入れているということである⁵¹⁾。

『ウナーディ規則』の作者は、伝統的にはシャーカターヤナと考えられている。このシャーカターヤナは、パーニニが自らの文典の中で文法学の先人の一人として言及する人物であり⁵²⁾、パタンジャリは名詞類の動詞起源説を唱えた文法学者としてこのシャーカターヤナに論及している⁵³⁾。

⁴⁹⁾ PM on KV to A 2.1.59 (II.80): prayogadarśanenākṛtigrāhyo gaṇaḥ ākṛtiganāḥ | (「言語運用の観察に基づき、見本に従って理解されるべき語群が典型群である」)

⁵⁰⁾ Cardona 1976: 170-171.

⁵¹⁾ パーニニが『ウナーディ規則』が規定する接辞に言及している規則としては規則3.3.1や規則3.4.75がある。

⁵²⁾ §2を見よ。

⁵³⁾ MBh on vt. 1 to A 3.3.1 (II.138.14-17): nāma ca dhātujam āha nirukte | nāma khalv api dhātujam | evam āhur nairuktāḥ || vyākaraṇe śakāṭasya ca tokam | vaiyākaraṇānām ca śakāṭāyana āha dhātujam nāmeti | (「そして[ヤースカは]『語源学』において『名詞類は動詞語基から生まれる』と言っている。周知のように名詞類は動詞語基から生まれる。このように語源学者らは言っている。そして文法学においては、シャカタの子孫が[そのように主張している]。つまり文法家たちのうちでは、シャーカターヤナが『名詞類は動詞語基から生まれる』と言っている」)

Uddyota (III.311): nanu teṣām evaṃ vyutpādanam kair vaiyākaraṇaiḥ kṛtam ity āśankyāha bhāṣye—nāma cetyādi | tad vyācaṣṭe—nāma khalv apīti | nāma dhātujam ity evam āhur nairuktā ity akṣarārthaḥ | tad āha—anyair ityādīnā | pāṇines tu tāni avyutpannāny evety bhāvaḥ | idaṅ ca āyaneyīnīti sūtre bhāṣye spaṣṭam | evaṅ ca kṛvāpety uṇādisūtrāṇi śakāṭāyanasyeti* sūcitam || (「【反論】 [確かに] 彼らはこのように派生説明をなしている。[しかし] 一体どの文法家たちが[そのような派生説明を] なしているのか。【答論】 このような反論を懸念した上で、『大注釈』では nāma ca 云々と述べられている。その[一節をパタンジャリは] nāma khalv api 云々と説明する。語源学者らは『名詞類は動詞語基から生じる』とこのように述べている。これが

略号一覧

- A: Pāṇini's *Aṣṭādhyāyī*. See Appendix III (Aṣṭādhyāyīsūtrapāṭha) in Cardona 1997.
 BM: Vāśudeva Dīkṣita's *Bālamānoraṁā*. See Caturveda and Bhāskara 1958–1961.
 KV: Jayāditya and Vāmana's *Kāśīkāvṛtī*. See A. Sharma, K. Deshpande, and D. G. Padhye 1969–1970.
 MBh: Patañjali's *Mahābhāṣya*. See Abhyankar 1962–1972.
 Nirukta: Yāska's *Nirukta*. See Sarup 1920–1927 (1984).
 PIS: Nāgeśa's *Paribhāṣendūsekharā*. See Kielhorn 1868.
 PM: Haradatta's *Padamañjarī*. See Mīśra 1985.
 SK: Bhaṭṭoji Dīkṣita's *Siddhāntakaumudī*. See Caturveda and Bhāskara 1958–1961.
 TS: *Taittirīya-Saṁhitā*. See Weber 1871–1872.
 Uddyota: Nāgeśa's *Uddyota*. See Vedavratā 1962–1963.
 US: *Uṇādisūtra*. See Aufrecht 1859.
 vt.: Kātyāyana's *Vārttika*. See Abhyankar 1962–1972.

参考文献

- 伊原照蓮 (1987) 「文学と音声学—インドの学問のあり方」『成田山仏教研究所紀要』10, pp.1–30.
 小川英世 (1991) 「*Gamyate, Gamyamāna, Gata, Agata*—『中論』II, kk. 1–6の一考察」『印度学仏教学研究』39–2, pp.883–887.
 桂紹隆 (1998) 『インド人の論理学—問答法から帰納法へ』中央公論社 ([2021] 法蔵館文庫).
 桂紹隆 (2021) 「龍樹における存在と言語」(早稲田大学東洋哲学会第38回大会, 講演会配布資料).
 川村悠人 (2017) 『パッティの美文詩研究—サンスクリット宮廷文学とパーニニ文法学』法蔵館.
 川村悠人 (2018a) 「詩と文法」2018年度科研・基盤研究(B) 中間報告書『南アジア多言語社会における複合文化のなかの文学伝承』(研究代表者: 水野善文) 所収 (pp.236–252) 東京外国語大学・総合国際学研究院.
 川村悠人 (2018b) 「パットーグディークシタの祭事哲学—文法学派ダルマ論のヴェーダ思想による裏づけと権威づけ」『比較論理学研究』15, pp.75–90.
 川村悠人 (2021a) 「『言語学大辞典』所収「インドの言語学」に対する覚書」『ニダバ (*Nidaba*)』50, pp.50–63.
 川村悠人 (2021b) 『神の名の語源学』溪水社.
 熊本裕 (1996) 「インドの言語学」『言語学大辞典 第6巻 術語編』(所収 [pp.83–100]) 三省堂.
 後藤敏文 (1989) 「*vācārambhaṇam vikāro nāmadheyam*」『インド思想史研究』6, pp.141–154.
 後藤敏文 (1990) 「インド伝統文法学をめぐって」『特定研究「近代諸科学から見たインド思想の批判的分析」報告書』所収 (pp.65–85) 岩手大学人文社会学部.
 小林信彦 (1988) 「アシュヴァゴーシャと詩人パーニニに共通する前古典性」『南都仏教』60, pp.1–16.
 田中於菟弥・上村勝彦 (1980) 『パンチャタントラ』大日本絵画.
 長澤和俊 (1998) 『玄奘三蔵—西域・インド紀行』講談社.

文字通りの意味である。そのことを anyair 云々を通じて [カイヤタ] は説明している。一方, パーニニにとっては, それら [uN などの接辞で終わる項目] は非派生項目に他ならない, ということが意図されている。そしてこのことは āyaneṅīni 云々という文法規則 [7.1.2] に対する『大注釈』において明らかである。そしてこのような場合, kvāpā 云々 [US 1.1] [で始まる] ウナーディ規則群はシャーカターヤナのものであることが示唆される) *テキストの śātakāyanasyeti を修正する。

- 野矢茂樹 (2006) 『入門！論理学』中央公論新社。
- 水谷真成 (1999) 『大唐西域記 1』平凡社。
- ロバート・ヘンリー・ロウビンズ (中村完・後藤齊 [訳]) (1992) 『言語学史』研究社出版。
- A. Sharma, K. Deshpande, and D. G. Padhye. (1969–1970) *Kāśikā: A Commentary on Pāṇini's Grammar by Vāmana & Jayāditya*. 2 vols. Hyderabad: Sanskrit Academy.
- Abhyankar, K. V. (1962–1972) *The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patañjali: Edited by F. Kielhorn*. 3 vols. Bombay: Government Central Press, 1880–1885. Third edition, revised and furnished with additional readings, references and select critical notes by K. V. Abhyankar. 3 vols. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1962–1972.
- Aufrecht, T. (1859) *Ujvaladatta's Commentary on the Uṇādisūtras: Edited from a Manuscript in the Library of the East India House*. Bonn: Adolph Marcus.
- Candotti, M. P. (2020) “Linguistic Segmentation in Early *Vyākaraṇa*.” In *The Bloomsbury Research Handbook of Indian Philosophy of Language*, edited by A. Graheli. London: Bloomsbury Academic, pp.13–38.
- Cardona, G. (1969) “Studies in Indian Grammarians. I. The Method of Description Reflected in the śivasūtras” *Transactions of the American Philosophical Society* (New Series) 59–1, pp.3–48.
- Cardona, G. (1976) *Pāṇini: A Survey of Research*. The Hague: Mouton.
- Cardona, G. (1983) *Linguistic Analysis and Some Indian Traditions*. Pune: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Cardona, G. (1984) “On the Mahābhāṣya evidence for a Pāṇinīya dhātupāṭha without Meaning entries.” In *Amṛtadhārā: Professor R. N. Dandekar Felicitation Volume*, edited by S. D. Joshi. Delhi: Ajanta Publications, pp.79–84.
- Cardona, G. (1997) *Pāṇini: His Work and its Traditions*. Delhi: Motilal Banarsidass, 1988. Second edition, revised and enlarged, 1997.
- Cardona, G. (2012) “Pāṇini and Padakāras.” In *Devadattīyam: Johannes Bronkhorst Felicitation Volume*, edited by F. Voegeli, V. Eltschinger, D. Feller, M. P. Candotti, B. Diaconescu, and M. Kulkarni. Bern: Peter Lang, pp.39–61.
- Cardona, G. (2014) “Pāṇini and His Predecessors: Tradition and Innovation.” *Journal of the Department of Sanskrit (University of Delhi)* 3–1, pp.1–21.
- Caturveda, G. Ś, and P. Ś. Bhāskara (1958–1961) *Śrīmadbhaṭṭojidīkṣitaviracitā vaiyākaraṇasiddhāntakaumudī śrīmadvāsudevadīkṣitapraṇīṭayā bālamānoramākhyaṅkhyayā śrīmājñānendrasarasvatīviracitayā tattvabodhinyākhyayā ca sanāthitā*. 4 vols. Varanasi: Motilal Banarsidass.
- Kahrs, E. (1998) *Indian Semantic Analysis: The nirvacana Tradition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kielhorn, L. F. (1868) *The Paribhāshenduśekhara of Nāgōjībhaṭṭa*. Part I: The Sanskrit text and various readings. Bombay: The Indu Prakash Press.
- Miśra N. (1985) *Kāśikāvṛtti of Jayāditya-Vāmana (Along with Commentaries Vivaraṇapañcikā-Nyāsa of Jinendrabudhi and Padamañjarī of Harādatta Miśra)*. 6 vols. Varanasi: Ratna Publications.
- Ogawa, H. (2005a) “*Gamyate, Gamyamāna, Gata, Agata*: The *Mūlamadhyamakakārikā* II, kk. 1–6 Re-examined.” *The Annals of the Research Project Center for the Comparative Study of Logic* 2, pp.63–75.
- Ogawa, H. (2005b) *Process and Language: A Study of the Mahābhāṣya ad A1.3.1 bhūvādayo dhātavaḥ*. Foreword by George Cardona. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Sarup, L. (1920–1927) *The Nighaṇṭu and the Nirukta, the Oldest Indian Treatise on Etymology, Philology, and Semantics*. [Introduction, London/New York: Oxford University Press, 1920; English Translation, London/New York: Oxford University Press, 1921; Sanskrit Text, with an Appendix Showing the Relation of the Nirukta with Other Sanskrit Works, Lahore: University of the Panjab, 1927. Reprint (3 parts bound in one), Delhi: Motilal Banarsidass, 1984.]
- Thieme, P. (1982–1983) “Meaning and Form of the ‘grammar’ of Pāṇini.” *Studien zur Indologie und Iranistik* 8/9, pp.3–34.
- Thieme, P. (1985) “The First Verse of the Trīṣaptīyam (AV, Ś 1.1 ~ AV, P 1.6) and the Beginnings of Sanskrit Linguistics.” *Journal of the American Oriental Society* 105–3, pp.559–565.

Vedavrata (1962–1963) *Śrībhagavat-patañjali-viracitam Vyākaraṇa-Mahābhāṣyam (śrī-kaiyaṭakṛta-pradīpena nāgojī-bhaṭṭa-kṛtena-bhāṣyapradīpoddyotena ca vibhūṣitam)*. 5 vols. Gurukul Jhajar (Rohatak): Hariyāṇā Sāhitya Saṁsthāna.

Weber, A. (1871–1872) *Die Taittirīya-Saṁhitā*. 2 Bde. Leipzig: Brockhaus.